

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

英語の間接疑問縮約についての動的考察

著者	現影 秀昭
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	17
ページ	37-50
発行年	2017-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001081/



英語の間接疑問縮約についての動的考察

Sluicing in English from a Dynamic Perspective

現 影 秀 昭

HIDEAKI, Gen'ey

1. 間接疑問縮約

本論考は英語の間接疑問縮約について動的
文法論の立場から考究する。しかし、その前
に対象となる言語現象の概要を示しておく。

Ross (1969) は、間接疑問文においてwh
句に後続する部分が、先行詞と重複する時に
削除される現象を指摘し、これを間接疑問縮
約 (sluicing) と呼んでいる。

- (1) Somebody just left – guess who.

(Ross 2012 : 16)

- (2) Bill saw someone, but I don't know who.

ただし間接疑問がwhetherで導かれる場合にはこの省略は許されない。

- (3) *Ralph knows that I went, but his wife
doesn't know whether I ~~went~~.

(Ross 2012 : 34)

さらに英語では (4) の (標準的なsluicingで)
wh-句はよいが、非wh-句はだめである。

- (4) Someone read that book, but I don't
know who.

(Craenenbroeck and Lipták 2013 : 516)

- (5) *John find someone but I think that Bill.

(Craenenbroeck and Lipták 2013 : 517)

しかし次の実例のように重複すべき先行詞節

がなくともGuess whoが出てくることもある。

- (6) He took Emerson's torn card out of his
pocket. Chose the call number. Dialed
the phone. Leaned his shoulder against
the wall and watched both ends of the
alley at once and listened to the purr of
the ring tone in his ear.

"Yes?" Emerson said.

"Guess who?" Reacher said.

"Reacher?"

[Lee Child. 2005. *One Shot*. Dell, New
York, p. 265.]

(2) のような文が特異なのはwhoである。(I
don't know) who Bill saw. という節と同じ意
味が理解されているが、ここではwhoだけが
取り残されている。who [_S Bill saw _T] のよ
うな構造が根底にあって、[_S Bill saw _T] が削
除されてwhoだけが残るのだと普通説明され
る。(さらに削除される部分) [_S Bill saw _T]
は節でなくてはいけないと考えなくてはなら
ない。これが文中心主義者 (sententialist)
の考え方である。knowの後ろの部分は、普通、
節の形をとるから、ここにwhoだけの断片が
くることは変則的だからである。聞こえない
要素を想定して、節を作っていくのである。

キーワード：間接疑問縮約、動的文法論、断片編入

Key words : sluicing, a dynamic model of syntax, fragment incorporation

Bill sawと同じ形がwhoの後ろにあると仮定すべき根拠がない訳ではない。削除は、先行詞となる文の中に同じ形がある（ときに適用される）。Chomsky（1965：144-145）は「削除の操作で削除できるのは、代役要素（dummy element）、構造指標の中に明示的に述べられている形式素（例えば、命令文におけるyou）、あるいはある範疇の指定された代表形（例えば、名詞句を削除するwh-疑問変形は実は不定代名詞に限られる — cf. Chomsky 1964: § 2.2）、またはその文の決まった位置に他の方法で表示されている（an element that is otherwise represented in the sentence in a fixed position）要素だけである。」と論じている。

つまり、同じものが、同じ文のどこかにあるとき削除が適用できるということである。この「他の方法で表示されている」ということを言おうとして、いろいろ研究が進んでいった。他の方法で表示する方法の中でも「格（の表示）」がはっきりするケースである。

(7) Bill saw someone

↑

①ここが対格だったら、

②ここも対格になる

↓

but I don't know [who Bill saw]

↑

③故に、発音されなくても統語構造があると考えた方がいい。

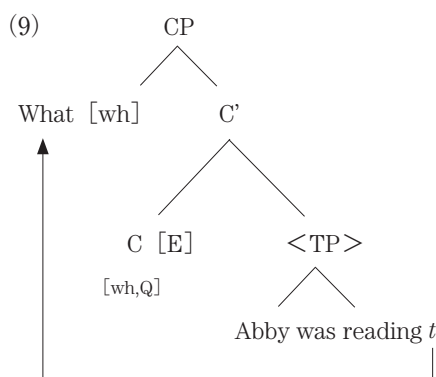
いろいろな証拠があるが、多くの研究者は文の縛りの中で考えてきた。（生成文法の主流派は）それを精密にしていくことしか考えていない。

2. Merchant (2004) の分析

Merchant (2004：670) は、sluicingというのは（8）に例示された様な構文で、疑問詞節がwh-句だけに短縮されているが、（9）の様な構造を持ち、主要部CがE (llipsis) featureをもっていると仮定する。削除を〈 〉で表す。

(8) Abby was reading something, but I don't know what 〈Abby was reading t〉.

(Merchant 2004: 670)



(Merchant 2004: 670)

(9') Abby was reading something but I don't know [_{CP} what_i [_{C'} C [E]_[wh,Q] [_{TP} ~~Abby was reading t_i~~]]. (Merchant 2004: 670)

この場合、wh-句をC⁰の指定部に移動し、[E] 素性は、（音韻部門に）その補部（TP）を①発音しないように指示する。②統語的には[E] がどこに現れるかについて言語間で違いがある。例えば、英語では[E] はTPのほかにVPも補部にとれる（e.g. Jose lives in Canada but I don't [E] [_{VP} live in Canada]：この場合はVPを発音しない）。しかしドイツ語ではVPを補部にとることはできない。③意味的には「[E] の後にある補文（TP）と同じ意味の文が先行詞としてある（つまり前後にはっきりと結び付けられる言語材料があ

る) ことを保証する (Merchant 2004 : 671-672)」。従って (8) は ABBY WAS READING SOMETHING BUT I DON'T KNOW WHAT FISH HE WAS EATING という意味にはならない (N.B. Stainton 2006 : 99)。

最後に、Merchant (2004, 2006) は、構成素を成さない非構成素の削除をどう説明するかという問題の解決策として、[E] が要素を取り出す節点に適用され、発音される部分を繰り上げるということを提案する (N.B. Stainton 2006 : 115)。

つまり上記の例で、なぜ *wh*-を上げて、残り (remnant) を消すのか (発音しないのか) というと、消すのは (発音しない) 構成素 (のまとまり) でなくてはいけないという前提があるからである。つまり以下の様な「虫食いの構造」を Merchant (2004) は作りたくはないのである。

(10) *Abby was reading something, but I don't know ~~Abby was reading~~ what.

省略された Abby was reading は構成素ではない。しかし [Abby was reading what] という文 (TP) 全体は明らかに構成素である。what だけを先に文の中から取り出しておけば、[E] がその補部 TP [Abby was reading *t*] に適用でき、それは確かに構成素であり、what は削除されずに残すことができるわけである。

テクニカルには、Merchant (2004 : 672) は先行詞と省略部分の間の意味的な関係として e-givenness (大まかにいうと、ヨ-タイプ変更を法として、表現 E が e-given であるのは E を含意し、また E によって含意される先行詞 A が存在するなら、そしてその場合に限るということである)。

(11) The Semantics of E :

$[[E]] = \lambda p : e\text{-GIVEN } (p) [p]$ (Merchant 2004 : 672)

さらに Merchant (2001 : 26) は省略の認定条件として「省略に対する焦点条件」提案している。

(12) Focus Condition on Ellipsis

A constituent *a* can be deleted iff *a* is e-GIVEN. (Merchant 2001 : 26)

省略される要素 E は先行詞としての A に関し て e-GIVEN である (つまり A も E も どちらも 焦点を当てられた部分 (F-marked parts) を 含まないから (省略してよい) : A が F-clo (E) を含意し、E が F-clo (A) を含意する (e-GIVEN である) からである)。

3. Merchant (2004) の批判とその代案

3.1. Merchant (2004) の関節疑問縮約の分析の問題点

Merchant (2004) にとって問題となりそうな事項を以下に挙げておく。

そもそも先行詞となる文があっても「[E] を適用するために、何か別のもの (を操作) で、2つ、3つ命題を選んでおかないといけない。しかし、先行詞として人が主張したとされることがもうわかっている命題にたどり着くために、省略されるだけの文を作って、それを解釈するのはむだである。」という Stainton (2006 : 142) が指摘する概念上・理論上の問題がある。

問題の二つ目は、[E] を含めて素性そのものが、理論的にどういう位置づけかはっきりせず、本当にそのようなものが存在するのか疑問があるという指摘が多くなされている点 があげられる (Miller (2002), Boeckx (2016), Richards (2016) を参照)。この [E] という

素性を仮定したアプローチが、到底実行可能（成功しそう）でないのである。あまりにも特定のthe [E] featureという理論的な性質も分からないものを使っている、他のいろいろ分かっていることと合わないのである。しかしCraenenbroeckは[E]を出発点にする。[E]というのを厳密に考えて、[E]の性質を変えて、[E]を修正して、この後分かってくるいろいろな言語の省略の説明をしようというCraenenbroeck (2012) などの試みがあり、かなり影響力が強かった(influential)から読まれやすい。Craenenbroeck and Lipták (2013)やGribanova and Manetta (2016)のように[E]素性を中心に据えて通言語的な違いを説明しようとする研究も根強い。

生成文法の主流派は[E]という記号を使って、記号だけで意味を考えないで演算しても分かるように、(しかも)[E]自身が脳内に実在するか(どうか)は考えないで説明(explication)の道具に使っているわけである。

もちろん「CPの主要部C(に何かあってその補部が消される)」「消したくない/残したい要素を(構造の上の方に)逃して、残りを消す」といって([E]に言及しなくても)同じことである。

もちろん特定の仮説が駄目だからと言って、理論全体が駄目ということではないという反論もありうる。

以上は理論内部の問題であるが、これ以外に以下の様な言語事実に基づく経験的な問題があると思われる。

補文ではなく、外置された節の中の「主語位置」に出てくる破格なsluicingの実例は[E]では扱いにくいと思われる。

(13) Since we're all going to die, it's obvious that when and how don't matter.

[Albert Camus. 1942. *The Stranger*. Translated from the French by Matthew Ward in 1988, Vintage Books, New York, p. 114.]

先行詞となる文が前に出てくるが、理由を表す従属節である。さらにwh-句は先行詞とは別の節すなわち外置された従属節の中の主語(=CP)である。主語(when and how)と動詞(do)の一致を考慮すると、CPを1つで済ませる派生と、CPを2つ作る派生が競合し、どちらが正しいのかいずれとも決めがたい。

- (14) a. ... that [_{CP} when and how [_{C'} [_C] [_E] [_{TP} we're all going to die <when and how >]]] don't matter.
b. ... that [_{CP1} when [_{C'} [_C] [_E] [_{TP1} we're all going to die <when >]]] and [_{CP2} how [_{C'} [_C] [_E] [_{TP} we're all going to die <how >]]] don't matter

つまり①when and howをTPの外に移動し、[E]の補部であるTPを発音しない(14a)と②CP₁のwhenをTP₁の外に移動し、[E]の補部であるTP₁を発音しない。続けてCP₂のhowをTP₂の外に移動し、[E]の補部であるTP₂を発音しない(14b)の2通りの派生がありうるわけである。実際の文処理/解析を考慮すると(14b)の派生の方が無駄が多いと思われるが、今のところ決め手となる証拠はない。

もちろん、この例はSluicingと非常によく似た別構文であるという主張も可能である。しかしMerchant (2004, 2006) 流の「移動と削除」の分析の対象となりそうであって、一筋縄ではいかないことは確かである。

一方、本論考の立場の様に1語期の性質を強く残すwh-語が1語で節相当の力をもつと言え、話が簡単である。節相当の力を持つ

習得の初めの段階で使っていたwhenとhowという単純な形が等位接続詞で結ばれているだけある。なおwh-語自体が先行するwe're going to dieを指す照応形であるという可能性もあるが、次に示すように先行詞節より前に間接疑問縮約の対象であるwh-語が出てくる場合もあるので、この立場はとらない。

次のように先行詞節 (something inside me snapped) よりも前に、Sluicingの対象 (関節疑問縮約節) であるwh-句が出てくる場合がある。

- (15) Then, I don't know why, but something inside me snapped.

[Albert Camus. 1942. *The Stranger*. Translated from the French by Matthew Ward in 1988, Vintage Books, New York, p. 120.]

[E] 素性は、「先行する」節と同じ内容が、[E]の後の補文に出てくることを保証し、後者を発音しないはずであるから、順序が逆になる上記の構造には適用できないはずである。

Sluicingがwithoutに導かれた前置詞句 (PP) 内の動名詞句に適用されることがある。

- (16) At that point, he turned in my direction, pointed his finger at me, and went on attacking me without my ever really understanding why.

[Albert Camus. 1942. *The Stranger*. Translated from the French by Matthew Ward in 1988, Vintage Books, New York, p. 100.]

- (17) ... [_{PP} [_P without] [_{DP} my ever really understanding [_{CP} why [_C C [_E] [_{TP} ~~he~~ turned in my direction, pointed his finger at me, and went on attacking me *t*]]]]]



しかし、without節は付加詞であるから、先行詞節よりも前に付加することも可能である。

- (18) At that point, without my ever really understanding why, he turned in my direction, pointed his finger at me, and went on attacking me

そうすると省略すべきTPを「先読みして」作っておいて、後から先行詞が出てきたら、それと同じだから発音しないことになり、本末転倒ということになる。もちろんwithout節が初めは右側の付加詞であったが、関節疑問縮約を適用したのち、主節の左側に移動したという分析も可能である。

次の例の様にSluicingが挿入節の場合もある。つまり先行詞節の一部となって（それを分断している）いる場合である。

- (19) For a long time I believed – and I don't know why – that to get to the guillotine you had to climb stairs onto a scaffold.

[Albert Camus. 1942. *The Stranger*. Translated from the French by Matthew Ward in 1988, Vintage Books, New York, p. 72.]

他言語でもこれと似た言語事実がある。

Ince (2012) は、トルコ語のsluicingで、先行詞となる節が名詞化された印がついているので、英語でいえばwhoseに当たるものが残余となるはずだが、それはだめでwhoにあたるものが残余となる現象を指摘している。

Ince (2012: 261) よれば、埋め込まれた節は名詞化されて、nominal/possessive agreementを示すという。埋め込まれた節の主語はgenitive caseを持ち、動詞は、genitive case-marked subjectとpossessive agreementするという。(20) のように埋め込み節全体

は主節動詞によってcase-markされるとince (2012 : 261) は言う。

- (20) Ahmet [kim-in Ankara-ya
 Ahmet-NOM who-GEN Ankara-DAT
 git-tiğ-i] -ni
 go-COMP-POSS.3SG -ACC
 san-lyor-Ø?
 think-PROG-3SG
 ‘**Who**_i does Ahmet think *t_i* went to
 Ankara?’ (ince 2012 : 261)

面白いことに、埋め込み文がsluiceされると、主語のwh-句は、(21) のようにnon-sluced counterpart のgenitiveではなく、nominative caseを持たなくてはならない（つまり英語で言えばwhoに当たるものが出てくる）とince (2012 : 261) は言う。

- (21) Ahmet [biri-nin Ankara-ya
 Ahmet-NOM one-GEN Ankara-DAT
 git-tiğ-i] -ni
 go-COMP-POSS.3SG -ACC
 söyle-di-Ø;
 tell-PST-3SG
 ama kim-Ø bil-mi-yor-um.
 but who-NOM know-NEG-PRES-1SG
 ‘Ahmet said **someone** went to Ankara,
 but I don’t know **who**.’ (ince 2012 : 261)

ince (2012 : 261) よれば、(22) に示してあるようにsluiceされた主語のwh-句にgenitive caseがつくと容認不可能になるという。

- (22) *…ama kim-in bil-mi-yor-um.
 but who-GEN
 know-NEG-PRES-1SG
 (ince 2012 : 261)

動態論的 (dynamic) な見方をすると、whatやwhoという単純なwh-句に対して、whoseは後からでてきた複雑なものであり統

語的に進んでいないということになる。つまりsimple-wh-phraseとcomplex wh-phraseを区別することになる (N.B. Craenenbroeck 2012)。Wh-語の基本的な性質が残っていて、それが後々まで影響を与えると仮定してみよう。トルコ語では埋め込み節は英語で言えばwhose destroying the cityにあたる形式をもつのだからwhoseに短縮しにくい。そうなると習得の一番初めの段階で使っていたwhatとかwhoという単純な形になるのである。

Whose-clauseのEllipsisから出てくるのではない。Whoとwhoseでは形が違うからである。whoを含む節 (who-clause) からwhoは出てくるはずだからである。そこに出ているのはwhoとかwhatという単純な形で、その形がI don’t knowと結びついてI don’t know who.となったと言える。つまりトルコ語は、もともとあったI don’t know who.がI don’t know who destroyed the city.の意味で使われるのである。この場合、言語習得の元の形が大人の文法でも残っていることになる。相当進んだ書記言語ではwhoやwhatという単純な形は使わなくなって、(I don’t know who she killed.のように) 完全文の形しか使わなくなっても、基本の単純な形と「～に基づく (is based on)」の関係で結びつく (間接疑問縮約の) I don’t know who.が底流に残っているのである。そうだとすると、他にも疑問文以外に節相当の意味と結びつく表現がある場合に、一語文の段階ではそうだったことが、完全文を使う段階になっても、それが強く残っていることもある事例がいろいろ出てくるはずである。これについては後述するが、一語発話で文相当の例を少し挙げておく。一語発話の段階ではdogもrunも疑問詞も焦点 (focus) である。節相当の意味の焦点を抜き出す。dog that

runの様に2語発話以降になると、それ自身が焦点とは限らない。Thatだったら、他のものと結びついてthat thingとなるが、自分自身は焦点ではなくなる。That dogのdogは焦点だが、背景(background)になっていくことが多い。(それに対して)疑問文は、2語でも疑問詞が焦点であり続ける。はじめからずっと一貫してwho came? (what came?)と2語文になって、who (what)が犬として焦点で、場面から分かってさえいれば、who came?の意味でwho?と言える。Wh語は短縮された完全形(full form)でない形で完全文と同じ意味で結びつく。最も強い、しつこくいつまでも基本の性質が残るのがwh-語である。一語で節相当の意味と結びつくのである。

なお次の事例はwhatが補文標識thatの後に出来て来ている。Whatが節相当の力を持つことを示していると思われる。

(23) "I feel fine. It's just ..."

"It's just that what?" Somerset said.

"It's just that ... Well, how can somebody let himself go the way this guy did? I mean, don't you find it a little disgusting?"

[Anthony Bruno. 1995. *Seven (Novelization)*. New Line Production Inc., Ruby Books, Tokyo, p.46]

今言った予測はwh-以外のものが節相当の意味を残している場合に、wh-とどうかかわるかということを述べたのだがwh-の方が基本的(basic)であると考えられる。

(24) He didn't know what / who ← もとのfragmentの形で使われることもある。

He didn't know whoのwhoが文と同じ解釈を受けることもあるということを述べた。間接疑問縮約は(習得が)進んだ段階のhe didn't

knowと基本的なwhoが結びついたとみられるので、中間的なものが見えやすい。このことについては、すでにいろいろな例で見た。

Merchant (2001, 2004)らの分析に話を戻すと、彼らはsluiceされた節は、そうでない節と異なり、[E]という形式素性があり、これは以下の様な省略を特徴づける統語的、意味的、音韻論的特性(syntactic, semantic, phonological properties)を束ねたものだという。

- (25) a. the syntax of [E] : E_[uw^h*, uQ*]
 b. the phonology of [E] : $\phi_{IP} \rightarrow \emptyset / E_$
 c. the semantics of [E] : $[[E]] = \lambda p : e\text{-GIVEN}(p) [P]$

(Craenenbroeck and Lipták 2013 : 509)

Sluicingが基本的で多くの言語に出てくるようであれば、Merchant (2004, 2006)たちの様なアプローチを採ってもいいが、She saw someone but I don't know who.のような間接疑問縮約文の形で、同じantecedentを直前に持っている構文は普遍的な基本構文とするのは不適切である。もっと基本的なものが結合してできている大きな結合を一つの単位として扱うことになるからである。要するに動態論的な見方をして疑問詞の特徴から出発して、それがどの様に派生してきたか見たほうがいい。She saw someone but I don't know who.は文脈によっては省略と解釈してもいいが、根本は単独で用いられたものが基本になっている。基盤になっているwh-句が非常に強いから、単独の疑問詞の性質に基づいているのだというのが、あちこちに証拠として出てくる。間接疑問文がトルコ語のように名詞化されて、whose coming, whose destroying the cityのように名詞化された節でしか表せない場合は、whoseだけを残すのは困難であ

るので基本形の単純なwh-語（= who）が顔を出すという例を上で挙げた。

Merchant (2001, 2004) のやり方をとるのであれば、whatやwhoという単純なものに対して、複雑なwhoseが文頭に抜き出すことができないということになってしまう。

下記の (25) は「問と答」のペアであるが、Merchant (2004, 2006) やStainton (2006a,b) の議論と大いに関係する資料である。

(26) ‘I strangled her.’

‘What with?’

‘A length of rope.’

[Ian Rankin, *Balck and Blue: An Inspector Rebus Novel*, Orion [1997 CWA Macallan Gold Dagger for Fiction], p. 3]

‘I strangled her.’ ‘What with?’ という陳述と問いのペアは、それぞれ容疑者と取調官が交互に発した発話であるが、2つ合わせてYou strangled her but I don’t know what with. という間接疑問縮約に相当する内容を表している。さらに ‘What with?’ にはstrangled (her) (という動詞句) が入っていないので、後に出て来るropeとつながりようがない。間接疑問縮約が2つの文に分かれて出てきた例である。つまり ‘A length of rope.’ という容疑者の答えは、同じ容疑者が既に口にした ‘I strangled her.’ も踏まえて、‘What with?’ に対する答の様にも見えるが、問となるwh疑問文の中にはstrangle(d) も入っていないので（問いと答えが）（表面上は）つながりようがない。なおa length of ropeは（I strangled her with ~の様な）1個の文を、修飾する（要素であるwith句の一部である）。

また次の対話はSluicingが2つの文に分かれて出てきた例ではないかと疑われる。

(27) “The ship was designed to be run by a minimal crew,” Khan told him. “One, if necessary.”

“One!” Scott blurted. “I don’t see how –”

[Alan D. Foster. 2013. *Into Darkness*. Pocket Books, New York, p.251]

つまりThe ship was designed to be run by a minimal crew. One, if necessary. One! I don’t see how – を全部合わせてThe ship was designed to be run by one but I don’t see how –.に（大まかに）相当する間接疑問縮約を表しているが、表面上はOne!に続けてI don’t see how –とScottが言っているだけで、しかも別の話者KhanのThe ship was designed to be run by a minimal crewのa minimal crewという発話が途中でOne, if necessaryのように切り替わったのを受けているわけであるから、Merchant (2004) 流に、単純に完全文を作って消す（発音しない）というわけにはいかない。

また、この例では “I don’t see how –” とScottが言って、語用論的な理由で、どうしたらいいかはどのみちわかるのだから、(Goldberg (1995) 流の)「文以下構文 (non-sentential construction)」を仮定して（構文に現れた語の意味と構文の意味を組み合わせる余分な）意味論の合成規則もいらない (Stainton 2006 : 89, 91)。

次も2人の対話でSluicingの先行詞となる文と間接疑問縮約された節の間に、疑問詞が1つ挟まっている。つまり話し手のsluicingの先行詞となる文 (somebody以下) に続けて聞き手が “Who?” だけ先に言って、もう一度先ほどの話し手が “I don’t know who,” と言っている。

(28) “… Somebody went in there and ran the

shower to mask the talking.”

“Who?” Borken asked.

Fowler shook his head.

“I don’t know who,” he said. “But I can try to find out.”

[Lee Child. 1998. *Die Trying*. Jove Books, New York, p.218]

この場合最初のwho一語でWho went in there and ran the shower to mask the talking?という文に相当する力を持つとしたら、I don’t know whoに嵌め込まれたwhoも一語でこの様な文に相当する力を持つと言えないだろうか？

3.2. 独立性の高いwh-句 — 展開の出発点

疑問詞（のwh-語）は断片（fragment）として用いられる用法が最も強いと言ってもよく、（習得の）早い段階から出て来る。相当進んだ段階まで（この）単独の用法が残る。節の中で用いられるようになっても単独で断片としての用法が多くあるからである。口語体の英語の資料の統計をとれば断片の方が圧倒的に多い（はずである）。論文などには出てこない。以下、wh-語が単独で現れる例、つまり独立性の高いwh-語の例を見ていくことにする。

以下に挙げたのは独立した（単独用法の）wh-語が「多重」に現れている例である。

- (7) *Vampire gore*/the Kafesjian-Herrick case – who?/why?

[James Ellroy. 1992. *White Jazz*. Vintage Books, New York, p. 311]

*Vampire gore*やthe Kafesjian-Herrick Caseは節ではなく名詞句（断片）である。who?やwhy?はどんなことをきいているのか理解するため、あるいはwho?やwhy?という問いに

答えるためには*Vampire gore*やthe Kafesjian-Herrick caseがどんな話の内容（命題）をあらわすのか、その中味を語用論的に補わなくてはなくてはならない。

SWIPINGと呼ばれる現象もwh-語の独立性の高さを示している。まずCraenenbroeck (2012) が挙げている (29) と (30) を見てみよう。よく知られている現象である。

- (29) Peter went to the movies, but I don’t know who with.

(Craenenbroeck 2012 : 57)

- (30) a. Lois was talking, but I don’t know who to.

- b. *Lois was talking, but I don’t know which person to.

(Craenenbroeck 2012 : 57)

(30a) の事実は関節疑問縮約とは違っている。普通はto whomという順番なのに、sluicingのときはI don’t know to who.であるのがwho toとひっくり返っている (cf. (29) もwith whoとはならずwho withとなる)。これをMerchant (2002 : 289) が名前をつけてswipingと いった。SWIPINGは、Sluiced Wh-word Inversion with Preposing In Northern Germanic の頭文字語（acronym）だが、who withとかwhat forとかひっくり返って出てくることを指す。それがなぜか (30b) の様にcomplex wh-phraseになるとよくない。これについて、本論考では複雑なwh-句が節（IP/TP）の投射に入っていくにくいということ を、動的な立場から指摘しておく。その間接的な証拠としてSWIPINGは文に埋め込まれない断片として出てくる実例が多いことを指摘しておく。

- (31) a. “I was told.”

“Who by?” [Ian Rankin. 1977. *Black*

and Blue. st. Martin's Paper backs, P.307]

b. "How about another phone call?" Jack asked.

"Who to?" [ibid., P.327]

但しSWIPINGはいつも起こるわけではない。

(32) "I'm delivering a package."

"To who?"

[Anthony Bruno. 1995. *Seven (Novelization)*. Ruby Books, Tokyo, P.243]

以下も接続詞+wh-語や単独のwh-語が出てくる。動的に見れば、一語で文相当の力を持つ習得の初期の段階のwh-語が大人の文法で再び顔を出していると説明できる。

(33) "Marilyn?" she said. "Six hours on the market, and you've got a nibble."

"I have. But who? And how?"

[Lee Child. 1999. *Tripwire*. Jove Books, New York, p.236]

(34) 'What I said could have been comprised into one short sentence. Instead I repeated myself *ad lib* without anyone but Madmoiselle Megan being aware of the fact.'

'But why?'

'*Eh bien* – to get things going! ...'

[Agatha Christie. 1936. *The ABC Murders*, HARPER, London, p.181-182]

これだけwh句の単独用法が強いと、大人のwh-句の単独用法も早い段階の基本的なwh-句の用法に見られる単独のwh-句に基づいて出てきたと考えたら、今まで言語理論でstipulationでしかなかったものをうまく扱えるかもしれない。Wh-句は単独用法が（初期の段階にはじまって）それからずっと続くわけだが、どの性質が続くっていくかというのと、

単独用法の（単独で用いられるという）性質が長く大人の文法の段階まで残るのである。

The CobraおよびSevenという小説から引用した“So what”や英字新聞の見出しの“So now what?”やwhat aboutやwhat ifになっても断片の形で生き残るのである。

(35) It showed a young hoodlum called Coker standing beside a pile of cocaine bales with one of them ripped open and the paper wrapper visible. So what? But he put it on the front page the next day.

[Fredrick Forsyth. 2010. *The Cobra*. A Signet Book, New York, p.289]

(36) People used to care about what they did, but now it seemed that no one cared. You do a shitting job, so what? You get paid anyway. [Anthony Bruno. 1995. *Seven (Novelization)*. New Line Productions Inc., Ruby Books, Tokyo, p.59]

(37) The big question for Romney : So now what?
[*International Herald Tribune*, Saturated-Sunday, November 10-11, 2012, p.1]

補文標識thatの後の普通ならIPが出てくる位置にwhatが出てくる実例は既に指摘した(= (23))。

3.3. 動的文法論に基づく代案

一つのポイントは、言語文脈 (linguistic context) を踏まえた用法がはじめてであり、大人になっても、そのような用法が多い（ということである）。Sluicingの様にI don't knowという節にはめ込まれた位置に断片が出てくる（こともある）。完全な文から省略

で出てくるのだという説にあまりとらわれず、断片の単独の用法に還元して考えた方がよいことが多い。sluicingは（完全文と断片の）中間的なもので（あるので）それ（断片のwh語の単独用法に還元して考えること）をやりやすいのである。

トルコ語（の中間段階）でも、単独用法がいかに反映しているか（ということを示して）、同様の証拠を提示してくれる（Ince (2012) がトルコ語の間接疑問縮約で、先行詞となる節に名詞化された印がついているので、英語で言えばwhoseにあたるものが残余となるはずだが、それはだめでwhoに当たるものが残余となる現象を指摘していることを前に見た）。その他実例でも示したが、これだけwh句の単独用法が強いと、習得の進んだ段階のwh-句の用法も、単独のwh-句に基づいて出てきたと考えたら、今まで言語理論で指定（stipulation）でしかなかったものをうまく扱えるかもしれない（という見通しが出てくる）。Wh-句は単独用法が（初期の段階にはじまって）それからずっと続くわけである。単独用法の（つまり断片が単独で用いられるという）性質が長く残るのである。

wh-語が断片の段階から節を担う意味を持っているということを本論考では主張する。他の要素もそうだが、2語以上になると焦点（focus）でない用法が出てくる。しかしwh-語は、いつまでたっても焦点のままである。相当進んだ段階でも単独で用いられるのである。文字通りwhat, whoが単独（で用いられる）だけでなく、もしwhatに何か（要素が）くっついてso what（やwhat about～やwhat if）のように（主としてwhatだが）熟語（表現の様なもの）を構成して、その全体が節を表してもいい（のである）。その全体が節を表

していないように表面上は見える（単独だ）が、「節全体」を表す（のである）。その資料がある。例としてはよく知られている。

(38) Privately, the editor knew his friend was up to something but he could not fathom what. The picture and caption came from a big agency, but based in London. It showed a young hoodlum called Coker standing beside a pile of cocaine bales with one of them ripped open and the paper wrapper visible. So what? But he put it on the front page the next day.

[Frederick Forsyth. 2010. *The Cobra*. A Signet Book, New York, p.289]

（wh-語は）いつまででも単独で節相当の力が強い。Sluicingの例のI don't knowの後ろの位置でも（この）力が働いているのである。相当進んだ嵌め込みの位置で（その力が）続いていく（のである）。「語のレベルより上の句の単位がほとんどできていないNunggubuyu語の抽象名詞（fightやtrade）や語根形式が談話上は完全文の代りをする（Heath 1986 : 38）」ことと、英語のwh-句が似た特徴を示すことも偶然ではないと思われる。

もう少し例を挙げると、次の例で最初のno matter whatの後にmay beがあるが、2番目のno matter what the priceのno matter whatの後ろにはmay beがない。No matter what may be the priceを補ったら文になるが、no matter what the priceという断片のままでmay beを補うという制限が破られている。この部分が単独で節相当の力を持っている。

(34) "This cannot go on. No matter what may be the eventual benefits. This has to stop, no matter what the price."

[Frederick Forsyth. 2010. *The Cobra*. A

Signet Book, New York, p.313]

Wh-の用法はいろいろあって断片の形で出てくるのはいろいろある。純粹の断片の連鎖から本当の（文の）文法になるとき、何がどういう順番で起こるか、その法則を知りたい。この手掛かりとして、比較的新しい言語としての手話なども資料になる。例えば Meir (2010) や Padden, Meir, Sandler, and Aronoff (2010) の研究がある。

wh-の場合は、最初単独で「焦点（focus）」を持ち続ける、その理由を見てきた。その理由のところが法則になって、wh-が帰結になる。

このため実例で見た “So what?” や “now what” や “what about” や “what if” のように他の要素と結びついたものになっても断片（fragment）の形で生き残るのである。

音韻的に見ると #What about ~# は一つの utterance として切れ目なしに用いられる。#What / about ~# の様な切り方はしない（のである）。

なお問い返し疑問の A what? や bring what? は、wh-語が句（名詞句や動詞句）や節に編入されはじめる言語習得の初期の残存構造と思われる。ただし、この場合も wh-語が「焦点」でありつづけるという基本の性質が執拗に残っている。

(39) a. “... And we must bring Provisions.”

“Bring *what?*” [A.A. Milne. 1926. *winnie-the-Pooh*. EGMONT, London, P.102, my underline]

b. “Do you have a traffic cone?” Reacher asked.

“A *what?*” [Lee Child. 2005. *One Shot*. Dell, New York, P.186, my underline]

3.4. 語用論的文としてのwh-語＋メンタリーズ

本論考で行ったwh-語が文であるという主張の傍証となる先行研究があるので紹介しておく。

単独用法のwh-語は、Stainton (2006 : 31, 36) が文を3つのタイプに分けたうちの「語用論的な文 (Sentence_{pragmatic}) : 単独で用いられて、何らかの用法を持つ（発話行為を遂行する）」と重なる部分が多い。語用論的な文は、例えば From myself (Stainton 2006 : 26) や On the stoop (Stainton 2006 : 64, 91) のようなものをいう。Stainton (2006 : 26, 93) は、これらが単純な削除によって派生したのではなく、意味論的な省略でもないと論じている。なお Stainton (2006 : 7) は「子供の言語」は自分の研究の焦点ではないと明言している。しかし、本論考では動的な観点から言語習得を考慮した過程説の立場をとり、その観点から Stainton (2006) を再解釈し、単独で用いられるwh-語が統語論的な文ではなく、(タイプ <t>ではないので) 意味論的にも文ではないと主張することになる。

本論考では、wh-語は疑問の様な発話行為を遂行することができる何らかの種類の用法を持つ「語用論的な文」とであると仮定し、メンタリーズで解釈が補完されると仮定する。この場合wh-語は言語習得の初期段階の1語発話の残存構造であるとみなせる。

本論考では Kajita (2004) の残存構造という概念と Stainton (2006 : 192) の「語はほぼ間違いなく語用論的な文である」という精神に立ち、「(一語発話の段階が、その後の展開のないまま残存し) 単独で現れるwh-語が(ほぼ間違いなく) 語用論的な文である」と仮定する。

Stainton (2006 : 158-159) の言葉で言えば “what, where, how” そして “why” に関しては語用論のプロセスが働くと本論考では提案する。単独で文相当の力を持つwh-語や、S but I don't know __ の様な構造に嵌め込まれたwh-語のすべてとは言わないが多くが、語用論的な文であるということになる。

さらに本論考ではStainton (2006 : 160) の Mentalese の観点からwh-語が文相当の力を持つということをつえる。人間の脳にはいろいろな機能 (faculty) があって、言語専用のものもあれば、いろいろな出所からくる精神の表示を統合するものもある (Stainton 2006 : 160)。知覚機能 (例えば視覚)、記憶、あるいは推論と言語からくる情報 (発せられた語／句の意味) が統合される機構が脳内にあるのである (Stainton 2006 : 160)。すべてが Mentalese という思考の言語に翻訳されることになる (Stainton 2006 : 161, 164)。

wh-語については、言語機能 (Barton (1991) 流に言えば、断片と先行談話を処理する言語的文脈の下位モジュール) がwh句の断片を解説 (decode) し、その内容を思考用の言語に翻訳し、言語から来た情報だけでなく、視覚や嗅覚などの感覚器官から来る情報、記憶から来る情報、推論から来る情報を、これらをまとめて演算する、あるいは統合 (integrate) する脳内の機構に送るのだということを本論考では提案する (N.B. Stainton 2006 : 174)。そこで (言語内の文脈をもとに言語外の文脈を使って) 語用論的に表現の「欠けた部分」が補われ、そこで命題を表すwh-語のMentaleseの文が形成される (N.B. Stainton 2006 : 160-161)。

whatやwhoは、早い段階でwh-表現が使えるようになると出てくる要素である。(それ

らが) 後にwho did the sameやwho cameのように (文相当の力を持って) 解釈される。間接疑問縮約の構造のここは (whatやwhoやwho withやwho toの部分は) 早い段階の結合で、それと相当進んだ段階のhe didn't know という形とが結びついて、これが新たな構造 (e.g. he didn't know who) になっている (もの) と (して) 見ることになる。

過程説に立つと (つまり動態論的な見方をすると) この (間接疑問縮約という) 構文は、かなり進んだものと基本的なものとが結びついて、基本的なものはまだ文法の中にあって言語の i という段階の文法が P という性質を持っていたら、それに基づいて P' が可能になる (ことになる)。このプロセスで出てきた P' は、次の段階の文法に入っているが、動的 (dynamic) な考え方で大事なところは、 G_{i+1} の文法の中に単に P' の特徴をもったものが存在するというだけでなく、 P' が P に基づいて出てきた (P' is based on P) という情報も、 G_{i+1} の段階の文法に含まれるということである。 G_i の特徴 P は習得の途中で用いられるだけでなく、基本的に、出てきた文法の中にも含まれているということである。図示すると以下ようになる。

- (40) a. If G_i^L has property P , then G_{i+1}^L may
have property P'
b. $G_i^L \Rightarrow G_{i+1}^L$
 $P \quad P'$

(Kajita 2004, slightly modified)

疑問詞は単独で用いられて節相当の意味を担っているわけである。言語の意味とは限らず、(言語の意味に加えて) 場面などからの補いで節相当の意味をメンタリーズで表示する。表示されたものを言語自体で表す。単独で用いられて節相当の意味を表すのは、疑問詞に

その性質が強い。他の単語もすべて一語発話段階（one word stage）では（例えば）dog やthat gunという単語も一語（one word）で、多くの場合、節相当の意味を表す。一番早い段階では、その場で見たたり聞いたたりしてわかる場面の事態（state of affairs）を表す。最初は特定の場面が事態であるが、段々進んでいくともっと複雑なものが出てくるようになるのでありそれも表すことができるようになるのである。

参考文献

- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. The M.I.T. Press, Cambridge.
- Heath, Jeffrey. 1986. "Syntactic and Lexical Aspects of Nonconfigurationality in Nunggubuyu (Australia)." *Natural Language and Linguistic Theory* 4, 375-408.
- Jeroen van Craenenbroeck. 2012. "How do you sluice when there is more than one CP?" In J.Merhcant and A.Simpson (eds.) *Sluicing*. The MIT Press, Massachusetts.
- Kajita, Masaru. 1967. *A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-Day American English*. Tokyo : Sanseido.
- Kajita, Masaru. 1976. 『変形文法理論の軌跡』大修館書店
- Kajita, Masaru. 1977. "Towards a Dynamic Model of Syntax." *Studies in English Linguistics* 5, 44-76.
- 梶田優. 1985. 「チョムスキーからの三つの分岐点」月刊言語 Vol.15, No.12. 大修館書店, pp. 96-104.
- Kajita, Masaru. 1997. "Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language." In *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eithtieth Birthday*, ed. M. Ukaji et al., 378-393. Taishukan.
- Kajita, Masaru. 2004. 『＜周辺＞＜例外＞は周辺例外か』日本語文法 4-2, 3-23.
- Merchant, Jason. 2001. *The Syntax of Silence*. Oxford : Oxford University Press.
- Merchant, Jason. 2004. "Fragment and Ellipsis." *Linguistics and Philosophy* 27, 661-738.
- Merchant, Jason. 2006. "Small Sentences." In Ljiljana Progovac et al. (eds.) 2006. *The Syntax of Nonsententials: Multidisisciplinary Perspectives*. Amsterdam : John Benjamins, pp. 73-91.
- Ross, John R. 1969. "Guess who?" In Robert Binnick, Alice Davison, Georgia Green, and Jerry Morgan (eds.) *Papers from the 5th regional meeting of the Chicago Linguistic Society*, 252-286. Chicago Linguistic Society : Chicago, III.
- Stainton, Robert. 2006. *Words and Thoughts: Subsententials, Ellipsis, and the Philosophy of Language*. Clarendon Press, Oxford.
- Stainton, Robert. 2006. "Neither Fragments nor Ellipsis." In Ljiljana Progovac et al. (eds.) 2006. *The Syntax of Nonsententials: Multidisisciplinary Perspectives*. Amsterdam : John Benjamins, pp. 93-116.